ウチの教授　中京大　近藤 良享さん

-フェアプレーの在り方

バレーボール部だった高校時代の練習試合。相手のスパイクがアウトと判定されたが、自分の指をかすめていた。「ワンタッチです」。主審に自ら申告し、チームは敗れた。監督から怒鳴られた。「正直に申告したのに、怒られるなんて、おかしい」と感じた。スポーツの現場でのフェアプレーの在り方を研究し、30年近くがたつ。

スポーツには審判が存在し、判定を下す。「例えば、サッカーでは、審判の目を盗んで反則の応酬になることがある。審判をあてにしても、選手の競技力は向上しない」と説く。

中京大は、多くの学生が体育会に所属する。卒業後は、実業団やプロの世界に飛び込む者もいれば、教師や指導者として教育の現場に立つ者もいる。「自分がフェアにプレーすれば、相手も自然とフェアプレーを心掛ける。その基礎を大学で身に着ければ、したたかさが求められるプロの世界でも、スポーツの楽しさや、やりがいを教える世界でもやっていけるはず」

こんどう・よしたか　1953年生まれ。筑波大大学院修士課程修了。体育科学博士。スポーツ倫理学専攻

スポーツで優劣を競い、勝利のために努力する中で、フェアプレーの必要性に気づいてほしいと願っている。「切った張ったで、目先の勝ち星にこだわるだけでは、つまらないからね」

【梶原遊、写真も】